

俠言

泉鏡花作

—

「へゝゝゝ、何がへゝゝゝだ、えゝ恚う、串戯ぢやねえ、最うお前これ、算へ年で二十七だ、一人持たなくつちや不可えぢやねえか。」

「壮伎は額を擦つて、

「だつて、兄哥。」

「だつて兄哥ぢやねえ、何も己が女房にならうとは言やしねえ。」

「知れたこつたあね、何處の國にか兄弟分の男を女房にするものがありますか、何も念を入れずとも事ぢやないか、そんなくだらないことを謂つて飲んでるから何時でも話がこんがらかつて、何が何だか些とも分らなくなつふんだよ、今日は眞面目に相談をおし、お前さんも條が通るまで酔つちや不可いよ、長さんも我慢をおし、事が極りやおめでたいんだから、私が半纏を脱いでも五合買ひますよ。」

と女房が口を添へる。此の亭主で即ち長の兄哥なる

もの、長火鉢の傍に弟分と差向ひで、

「前祝だ、飲まねえぢや景氣が悪い。何もこれ意見を謂ふんぢやなし、お酒で運をつけなけりや長も己も話が迂らねえ、熱いのをつけやな。」

「ぢや、祝つて酌がうよ、さあ長さん。」

「えゝ、未だあります、ト、ト、ト、姉さん何ですかね、兄哥が女房を世話してくれようと謂ふんで。」

「あゝ、先方は御の字なんだよ、是非其お前さんに、正月だといふのに、そんな鍵裂のした衣服なんか着せて置きたくないんだとさ。」

「何うも難有うございます。」

兄哥遮つて、

「やい、禮を謂ふな、禮を。何よ、待ちねえ、何だつけか焦ツたい。」

女房少も分らず、

「何さ、」

「あの、それ、己が花主場の丸鐵の御隠居が凝つて居る。」

「講釋かね。」

「いんにや、川柳よ、川柳、其にあら、恚うだに

因つてト、厚く禮いはるゝ戀は出来ぬなりツ、何うも思召は難有う。幾重にもお禮をと来ちや、おあひだゞ、内の此奴なんぞも不出来にや不出来だけれど、散々依怙地を仕抜いた擧句に、己が口から、恚う仕様がねえ、不自由でおらあ最う、うんざりしたから、臺所の始末をしてくんねえ、と口説くとな、

（様あ見やがれ。）といつて忽ち承知だ、何うだ、不出来だらう、しかし御禮申された部ぢやねえから、出来たにや出来たのよな。」

「何を謂つてるのさ。」と銅壺に突込んである徳利の口を、挿んだ手つきで壓へながら、女房は面を背ける。

「先づ、おのが、恥を謂はねえけりや理が聞えねえ。」

「そんな理は聞えなくつても可いよ。」

「然う、また理を嫌ふことはない、質の流月ぢやあるめえし。」

「可い加減になさいよ。」

と横を向いたまゝ、膳の上へ丁と置いて、

「最う酔つてるよ、厭なんだ、ねえ長さん。」

「何酔ふもんか、さあ、もつと熱いのを、」

「長さんは温いのが好なんだわ。」

しばらくして、大業に、

「はッ、いかさまな、長、汝の好をば、己らより  
嬢々の方で御存じだ、婦人といふものは行届いた優  
しいもんだ、恚う人の女房で恚うだから、さて、自  
分のとなつて見ねえ、そりや口でいふやうなもんぢ  
やねえ、面と向つてこそ、やい、七面鳥と遣ツつけ  
るが、蔭ぢや拜んでら、眞個のこつた。」

「不可え、意見だか、惚氣だか、こりや譯がわか  
らねえ。」

女房は嬉しさう、但しさうを煙草とゝもに飲込ん  
で眞面目、

「まッたくさ、長さん、私をくらべものにしちや、  
テンから破談だけれど、お前さんに相談をしようと  
いふのはね、そりや最う、何うも、何ともいひやう  
のない姉さんだよ。」

ちから  
力を入れて染々と謂はれたので、  
わかも  
些と更つ  
あらたま  
た形で、  
かたち  
兩提の煙草入、  
じやつきげ  
煙管を膝に取つて捻りはじ  
めた。

「姉さん、誰です。」

「まあ、長さんの方から極なくツちや。」

「お前、兎も角も女房を持つ氣か、持たねえ氣か、  
めを、  
それ  
極めてからでなくツちや話が出来ねえ。」

「思切つて、お持ちよ。」

「馬鹿なことを、思ひ切つて持つ奴があるもんかい、  
おも  
思ひ切らずに持つんだ。」

「何をくだらない、何だつて可いぢやないか、眞  
な  
個にさ、  
たう  
長さん、  
ちやう  
然うすりや、  
さ  
意見をされなくツた  
いけん  
つて、  
ひとりで  
自然に、  
あそ  
遊びも留むわ、  
や  
酒もひかへるわ。」

「姉さん、私あ、  
ねえ  
そんなぢやねえ、  
わたし  
女房を持つ  
にようぼう  
たつて、  
なん  
何の。」

「まあ、可いよ、  
いい  
そんなことは後の話、  
あと  
夫婦にな  
いつしよ  
つてから、  
ていしゆ  
良人の身持の治る、  
なほ  
治らないは、  
なほ  
そりや  
かみさん  
女房の腕次第、  
うでしだい  
差當つて、  
さしあた  
橋渡の私等が兎や角う謂  
はしわたし  
わたくし  
ふことはないがね。  
なに  
何しろ、  
いい  
良い腕を持つて居る癖  
くせ

に、獨身ものゝ悲さぢやないか。晩のお菜に昆布巻を買つて歸つて、懷中中汁だらけになんぞしないやうに、早くおしなさいよ眞個にさ。」

「だつて、昆布巻の加減の好いのは一寸異  
・  
皆まで謂はせず、」

「長、やい、そんなことを謂ふな、其の昆布巻だつて構はねえから、一人で寝るなといふことだな。  
な。」

「媽々、だね、」

「むゝ、」

「をかしいな、ま、最う一ツおくんなさい。」と  
つめかけた煙草を其まゝ差置いて一口煽つた。

「私あ貰つても其の何だから、女房はをかしいや。  
」

「何がをかしい。」

「だつて、友達が何だからね。」

「待ちねえ、お前の友達なら、皆おれの友達だ、其の俺が世話をするんだから、一言もあるめえ、誰が何といふもんか。」

「然うかね。」

と指出す猪口についと酌して、

「貰ふ氣か。」

長は黙つて又傾けた。

「ねえ、長さん。」

「姉さん、まあ誰なんです。」

「これをいつた日にや。」

「お待ちよ、私からいふから。」

「何でもこりやさきへ謂つた方が眞先に、長に大恩を被せるのだ、あのな。」

「あれさ、私が一生恩人になるんですよ。一寸、」

「黙んねえ。」

「こりや驚いた可いよ、恩に被るなら二人とも被るよ。姉さんに小遣を強請つたつて、兄哥に内證にしちや置かねえ。又、兄哥に世話になつたつて、姉さんに禮をいはねえで居たことはありませんや。」

兄哥、がツくりとうつむき、

「あゝ、能くいつてくれたい、恚う頼母しいぜ、其處へ惚れたんだな、實は何だ、お正月だから姉さんの名もおめでゝえや 名はおめでゝえが人間は甘

えんぢやねえ、柄こそすらりと大いが、キリ、として、頭とやられると、此の方でもピリ、と應へようといふ、ソレ知つて居よう、松屋の、ソラ、

「え、」

「お梅さんだ。」

「兄哥、兄哥！」

「む、む、」

「串戯をいつちやいけねえ。」

「ね、御覧なさい、及びもない、御大家のお嬢さ  
んだから、仕やうがないけれど、これで、媒的役す  
りや私たちは、一生お前さんの氏神だよ。」

「何うだ。」

「だつて女房だなんて可笑いぜ。」

「ぢや、何うする。」

「私は貰つて、友達で付き合はう。」

「一寸、御覧な、あれ、お前さん長さんが、あんな可愛いことをお謂ひだよ、友達にして附合ふとさ、私はお梅さんが、彼處へ惚れたんだらうと思ふよ。」

「何處でも可い、芝でも本郷でも、路地でも、突當りでも可いが、然う事が極つたら、こゝで相談だ、長、と更まる。」

「何え。」

「まづ、其の酒を控へろ、おつと、今夜ぢやねえ。いや、又、今夜には限らねえ、俺が内へ来て、媽媽の酌で飲むくらゐ、いくらがものだ、構はねえが、纏つた錢を握りや、足を拂いて會席茶屋へ駈け上る。井の底を探しちや、天麩羅で五錢が爛よ、さもしくなると、中をくんねえで、にごり屋の賣出を狙つて、淺草と、深川と酢章魚の脚と、芋の煮つけの大小を較べるのは何たることだ、俺が聞いたつて感心しねえ、堅氣な方に聞かして見ろい。それから遊びだ。」

「えゝ。」

「一言もあるめえ。而してお前、しばらく辛抱をしてよ、縞ものでも可いから羽織の一枚も引かけね

え。」

「私あこれで澤山です。」

「何、澤山なことがあるものか、お前は澤山でも、それぢや先方様へ話が出来ねえ、それからまあ、いかに獨身もので構はねえたつて、曲んだ格子戸を開けて入ると、竹の皮を投出した土間に、アノ冷飯草履を二三足脱棄てにしたのは恐しいぜ、雪駄でも買つてよ、前桐でも可いから、二三ヶ月堪忍をして箆笥の一棹も買はねえか、何より重寶なのは長火鉢だ、こりや是非一個なくてはならずよ、急に鐵瓶にも及ぶめえが、土瓶でも可いから据りの好い、ひゞつたけの入れねえのをかけるんだ。屑籠にも土瓶數にも、煮るに、も、焼くにも、炊くにも、七輪ばかりは始末が悪いや。」

一寸二ツ竈といふと、おツくふだが、一ツ備へつけることにするんだな。」

「長さん、佐竹ツ原なんぞにや、いくらも又出ものがあります、私が一所に行つて見て上げよう、それからね、對手が對手だからね、腰板の處が捻れても大事ないから、袴の工面をおし。而して、さあ話

がはじまるといふ日になりや、人の出入もあらうし、手あぶりも買はなきやならず、火箸一ツだつて、角の天井を取つたあとの杉箸を突刺しちや、燻つて仕やうがなからうぢやないか。」

「ありやね、魚勘が、歳暮に呉れました魚串の改良でさ、姉さんお前、姑がねえと思つて、杉箸を煙つたがらア、贅澤だ。」と酒はまはつたが、眞顔でいふ。

「あれさ、」  
「亂暴だな、恚う串戯ぢやねえぜ、人が眞剣で世話を焼くのを、茶かして居やがる。」

「壮佼は苦笑して、」  
「だつて、お前さん方、松屋のお梅さんなんて、可加減な事をいつて、私に世帯道具を買はしたり、衣服を拵えさしたりしようたつて、然うは行かねえ、阿魔のお世辭ぢやねえけれど、おつと其手はくひますまい。」と又煽る。

「情ない野郎だな、直にぶつかつて、染々姉さん

からも口説かれりや、二十五まで縁遠い、総領の娘、  
しかも容色といひ、氣立といひ、親の口からは謂ひ  
悪いが五人の娘の中でも、飛離れた上出来、あまり  
出来過ぎて、氏神の山王様がお惜みなされて、其で  
片附かぬことゝあきらめて居た姉娘、出入の大工の  
長吉の處へ嫁きたいといひ出した、腕はよくツても  
評判のあの酒飲、あまりの事に之も矢張り、氏神さま  
の思召ぢやと思つて合點をする。悪く揃つて又、山  
の手、下町、下総の在までかけて、三十七軒の一家  
一類、どれも／＼金を拵へることの上手な奴ばかり、  
こゝで一人つかひ失す者を授かることゝ往生する、  
随分念を入れて此の縁を纏めてくれと、大旦那御夫  
婦に、目の前で謂はれてせえ、まさか手前にはと思  
つて、己も眞個にやせなんだが、長、疑はあるめえ、  
―― 慥ういふ次第だ。――

長吉黙つて聞いて居たが、

「ぢやあ何ですか、お梅さんも來たいといふし、

大旦那もくれようといふんですか。」 大きく、

「然うよ。」

女房は長吉の顔を見詰めて控へた。

「だがね、兄哥、来る奴も、呉れる奴も。」

「奴とは何だ。」

女房傍より、

「まあさ、」

「来る奴も呉れる奴も誰にですえ。」

「何をいつてる、お前にだな。」

「此の長吉ン許へ来るんでせう。」

「然うよ、」

「箆笥、長火鉢、」

「何だ。」

「羽織、袴の許へ来るんぢやありますまい。」

「や、」

「土瓶、竈、」

「黙れ！」

「火箸、鐵火箸、せつかい、摺鉢、摺粉木。」

「黙れ、やい、黙れツてえに。」

「まあさ、お前、長さん、お前さんも何だね、  
そりや大旦那はお前を素裸と承知だけれど、其處は  
お梅さんが、女氣さ、些とはお前の心意氣も見たい  
やね、譬ひ火箸片端でも、私のために長さんが支度

をして待つてゝくれたと思や、どんなに嬉しいか知れやしない、其處を含んで謂ふんだよ。これが風呂敷包を背負つて、片手に鐵漿壺をぶら提げて来るお腰の大きい女房を持つたつて、夜具ツ皮ぐらゐ洗濯をするが當前だもの。

それを何と、鼈甲の櫛笄ばかりでも二百兩たらずのお支度だつて謂ふぢやないか。それが、白無垢の襲衣で、いきな中將姫が脱出したやうに、お前さんの古畳の上へ、勿體ない、緋縮緬の長襦袢で、あのすらりとしたかよわい姿で顯れようといふのぢやないか。辛抱をおしツてば。」

「嫌です。喧嘩にや負ければツても、女の兒にや降参しねえ。私が許へ来てえのなら、路地の溝板に氣をつけて、勝手口の芥溜を跨いでよ、足の裏を汚しちや不可えから、いきなり流板の雑巾を取つて、板の間を拭きながら、六疊へ入つて来て、長さんお見棄なく、幾久くとお辭儀をするんだ。此方ア阿魔の達引にかつゑ切つて居る處だから、すぐに裸體に引剥かあ。」

「野郎！」

「長襦袢の上へ襷がけで、直ぐに井戸端へ出て米を磨げ。」

「黙れ！」

「其の氣なら跣足で駈込んだつて女房にしてやると、お梅さんにいつてくんねえ。」

「罰の當つた！此の野郎。」

と片膝立てた、險幕がたゞ事でないから、

「姉さん、兄哥にや詫てくんねえ。」といひずてに、ポント門口を飛出した。びしやりと閉めて、つか／＼と歩いたが、片手に煙管、片手に煙草入を持つたまゝ、イんで、ぢつとしばらく首垂れて、ほつと歎息をしてくると、引返さうとして、

「外聞が悪いやい、まゝよ。」といふとガツキリ煙管をさして、兩ツ提を三尺にぐいと、腰を捻つて駈出した。

「ありやいやん／＼／＼。」

骨髓に入る寒月に、長吉は震へ聲。

【完】